

自己評価および外部評価結果

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営				
(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	令和2年3月に理念を更新した。職員及び運営推進委員の意見を聞きながら作成した。理念は利用者にも見て頂けるようにリビングに掲示している。	現在の事業所理念は、職員からのアンケートや運営推進会議内で意見をもらいながら前施設長が作成したものである。玄関やリビングの見やすい場所に掲示されている。	事業所理念は目指すサービスの根本的な考え方であり、迷ったときに立ち返る根幹でもある。定期的な振り返りの機会を持ちながら実践に繋げていく具体的な仕組みづくりと、利用者、家族、地域への発信方法について検討し、理念が広く浸透するための取り組みを期待したい。
(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	広報誌(敬寿だより)を町内に回覧している。地域情報を把握し、サロンやコーラス、地域行事に参加している。しかし今年度はコロナ禍であり参加実績はない。市内中学生の職業体験についても毎年受け入れをしている。本来であれば専門的な知識を地域住民にも還元できるような取り組みを検討するべきだが、現状の職員態勢では行うには至らない。	菊祭りや塞ノ神、町内の運動会や老人クラブなど、地域の行事には積極的に参加し交流を深めていたが、現在はコロナ禍の影響を受け制限されている。新しい生活様式の中で、新たな取り組みや事業所からの発信をしていく必要があると施設長は感じている。先月から広報誌「敬寿だより」をリニューアルし、地域住民に向けた認知症の理解を深める啓発活動を行っている。	
	○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	敬寿だよりを通じて認知症高齢者のケアの実際、日々の暮らしぶりや、活動の様子を発信し、いきいき暮らすことができる事を紹介している。	/	/
(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回開催している。令和2年度は書面開催とし、これまで3回開催している。委員からの意見も書面である為、率直な意見とはならないことに課題を感じている。	2ヶ月に1回、今年度は書面でのやり取りで開催している。助言や要望等を記入する意見用紙を同封し郵送しているが、構成員から意見が返ってこないことも多く、やり取りの工夫が必要と感じている。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	上越市担当者から介護情報、気象情報等適時に情報が届いている。運営推進会議開催後は会議録を提出し、上越市高齢者支援課介護指導係へ相談する事ができる。担当の地域包括支援センター職員が運営推進会議の構成員であり、専門的立場からの意見を伺う事ができる。	市の担当者には運営推進会議に参加してもらい、事業所の取り組みや利用者の状況を伝えている。また、地域包括支援センターは同法人で隣接施設内にあり、運営推進会議への参加以外にも相談したり助言をもらいながら協働関係を築いている。	
(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	高田の郷グループ身体拘束適正化委員会所属し年4回の評価会議に参加している。毎年、身体拘束に関する研修を実施し日々のケアを振り返る機会となっている。玄関は施錠せず、居室の窓も開放している。ただし、個別の状況によっては居室窓の制限はある。	法人内研修への参加や委員会の取り組みを職員間で情報共有し、身体拘束をしないケアについて理解を深めている。以前は入居前からの転倒防止用体感センサーを使用継続していたケースがあったが、入居後、生活環境を整えると共に安全な動線確保の検討を重ねた結果、不必要の判断から解除へと評価した事例がある。	
5-2	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	不適切ケアについての振り返り研修を実施し、職員間で意見交換を行った。	自己点検票を用いて職員自身やお互いの不適切なケアや言葉遣い等がなかったかを振り返り、フロア会議内で改善策を話し合い実践している。また、年1回のストレスチェックの実施や面談を通じて職員の精神的負担についても確認し、防止に取り組んでいる。	
	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護委員会の委員を中心に、施設内の課題を挙げ議論する機会がある。		
	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時の説明は丁寧に行うよう心がけている。令和2年4月に管理者が交代して以降は新たな契約はない。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定例の運営推進会議に利用者及び家族が構成員として参加している。ただし、今年度は書面開催としているため、現地で開催できていないこともあり、意見の吸い上げが浅い状況である。	家族には運営推進会議の場だけでなく、面会や電話連絡の際に気付いたことや要望等を伝えてもらえるよう働きかけている。日頃の関わりの中で利用者のさり気ない思いを聞き取り、最近では事業所の広報誌の文字が小さく読みにくいとの意見に対し、紙面を拡大して写真や文字が読みやすい広報誌へと移行できた対応例がある。	
(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議を定例で開催し職員が意見や提案行う場となっている。施設長やリーダー職員がグループ会議、運営会議において、経営に対して状況を確認し、現場に反映させる体制がある。	施設長は職員の意見や要望等、日頃から相談しやすい雰囲気づくりに努めている。委員会での活動や定例のフロア会議内でも積極的に意見を吸い上げ、職員の気づきが運営に活かされ、現場に反映できるように取り組んでいる。	
	○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を活用し、適正に評価し、その結果が給与にも反映するシステムがある。考課面接が育成の場として活用できる。時間外勤務を極力抑える努力をした勤務管理に努めている。時間外勤務も限定的である。年間5日以上の有給休暇の取得についても計画的に行い始めた。		
	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人研修体制に基づき、計画的に参加している。認知症実践者研修には今年度1名参加する予定となっている。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	職員の施設間交流を事業計画に位置付け取り組みを行っていたが、今年度は実施できていない。参加した職員からは刺激になったと好評である。法人4グループホームの施設長が意見交換を行う機会が毎月定例であり参加している。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者には担当職員が相談窓口として中心になって関わっている。さらに、介護支援専門員、管理者がそれぞれの立場で対応している。情報整理の点では課題があると感じる。		
	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	介護支援専門員、管理者が入所前に面談を行い、要望を伺っている。なかなか本心、本音は発信しにくいと自覚している。家族に不快な思いをさせないように、面会の際は丁寧な接客を心掛け、日頃の様子を伝えている。		
	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申し込みの時点で、施設の機能を説明している。仮に施設利用が困難と思われる状態の場合は代替サービスを紹介するようにしている。		
	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者のできる事を見極め、いわゆる家族の一員として、できる範囲で家事作業への参加を促している。家事作業ができない人でも、これまで続けてきた習慣や趣味を継続できるように支援している。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7-2	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には定期的に生活の様子を手紙と写真でお伝えしている。受診や各種手続き等、家族と相談をしながら進めている。	現在は面会制限をしており、電話連絡や居室担当者が作成する写真付きのお便りで生活の様子を伝えている。今後はオンライン面会の利用を広め、本人と家族の絆を大切にしながら利用者と家族との関係が途切れないように支援していきたいと考えている。	
(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	関係継続の支援は大切にしたいが、入所前にすでに途切れてしまっていることも多い。受診のタイミングで家族と外食を定期的に行い、楽しみにしている方がいる。以前働いていた観光地のパンフレットを取り寄せる等、個別の支援を工夫している。外出は計画的に実施したいが、今年度はコロナ禍で制限せざるを得ないが、オンライン面会を実施している。	入居時の聞き取りや日々の会話等から馴染みの人や場の把握をし、家族の協力を得ながら個別支援に努めている。受診後の家族との外食や、年末年始の外泊を継続している利用者も居られる。居室に家族や孫の写真を飾っている方が多く、写真を見ながら話題にするなど外出や面会ができない中でも関係が途切れないよう工夫している。	
	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	施設で知り合った人同士ではあるが、お互い名前も覚え、助け合う場面もある。職員は関係性に配慮した配席を定期的に見直している。また、余暇時間の過ごす様子など良好な関係でいられるように努めている。		
	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所した後も、ご家族が必要と判断されれば支えていく姿勢で相談や支援に努めている。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当介護職員が中心に日々傾聴に努めている。モニタリングの結果を踏まえ、希望や意向に添い生活ができるように検討している。	日々のかかわりの中で答えやすい簡単な質問を繰り返しながら、些細な事柄でも情報を蓄積するよう努めている。担当職員が中心に本人・家族等の思いや希望・意向を把握しライフサポートプランへ情報を書き溜め、生活を支えるためのアセスメントを月1度は見直しや検討、確認を行い職員間で情報共有している。	
9-2	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に訪問調査を行い本人、家族に聞き取りを行っている。また、本人との会話の中から生活歴を把握し支援につなげている。	これまでの暮らしの把握は本人・家族等の面談時や自宅への訪問時に本人の生活歴や過去の具体的な情報を「私の生活史ノート」を活用し、個性や価値観を伝えてもらえるよう取り組んでいる。入所以前かかわりのある事業所や病院等からの情報も合わせ、入所後の日常会話から馴染みの暮らし方等を聴き出す工夫をしている。	
	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活の記録を行い、情報共有、状態把握に努めている。		
(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のモニタリング、3か月ごとの総括のサイクルでケアプランを作成している。必要に応じ、高田の郷の専門職から意見をもらい、ケア方針に活かしている。介護支援専門員は介護職員と兼務であり、日々の介護業務に追われる状況がある。業務改善の必要性を感じる。	担当職員は本人・家族等の思いや意見を引き出し毎月のモニタリングを繰り返し、アセスメントを含め職員全体でケアプラン会議を行うことで現状に即した介護計画を立てている。全職員の意見や気づきはパソコン内へ常時記録され、情報共有と共にサービス担当者会議にも活かされている。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録支援システムを活用し記録作業を行い、情報共有を図っている。効率的、効果的に活用していく上での課題があり、見直しを図るつもりでいる。		
	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟に支援する心得はある。特に受診は緊急性もある為、家族の状況を勘案しながら必要であれば施設で対応を行っている。また、日用品の購入についても柔軟な対応をしている。		
	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	上越市の高齢者支援事業を把握し利用している。布団乾燥サービス、訪問理美容サービス、おむつ支給サービスを申請し費用負担の軽減を図っている。		
(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は川室記念病院とし、職員が付き添い定期的に受診している。入所後も生活の継続を図る意味で、かかりつけ医を変更せず受診をしている方もいる。受診の際はかかりつけ医に情報提供を行っている。	本人や家族等の意向を確認しながら、かかりつけ医の定期受診は家族等へお願いしている。受診時は日常の様子等を受診連絡票を用いて医師へ情報伝達し、受診結果の情報も共有できるよう取り組んでいる。緊急時や協力病院への受診は職員が対応するなど適切な医療を受けられるよう支援している。	
	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員の配置はない。また、高田の郷と連携体制があり、健康面の相談は速やかに対応できる環境にある。健康観察ポイントなど看護師から指導を得て、マニュアルとして整えている。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の関係者と情報を共有し退院後の対応、または協力病院につなげるように努めている。		
(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	特に内科的疾患がある方には家族と情報交換をしながら、緊急時の対応について確認をしている。しかし、記録としては整備されていないため、トラブル回避の対策を課題としている。	契約時には終末期の対応を行っていないことを丁寧に説明している。特に内科系の疾患のある方や認知症の進行による重度化となった場合は、対応できる施設への移行を本人や家族の意向を踏まえ、段階的な話し合いと説明を重ね確認しながら努めている。	
(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のマニュアルを整備し、職員間で確認した。毎年、心肺蘇生の研修が開催されているが、今年度はコロナ禍であり実施はしない。	緊急時のフローチャート図はわかりやすく確認しやすい場所に備えてある。急変・事故対応マニュアルは症状別に細かく整備され、フロア会議では実践で活かせるよう職員間で確認し合っている。緊急時の救急隊引き継ぎ用紙が利用者別に作成しており、慌てずに確実かつ適切な行動が取れるよう取り組んでいる。	
(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間訓練計画に基づき訓練を行っている。訓練には地域の参加もある。7月、火災警報器の誤報があった時、地域の消防団員が速やかに駆け付けてくれた。	母体施設の防災計画に従い合同訓練に参加し、備蓄品については敷地内の隣接施設が管理している。震災害時に効率かつ安全面を考慮した職員のための指示図が作成され、一番近くの施設へ駆けつける「大災害時駆けつけ施設区域図」がある。各居室には防災頭巾を用意し、地域の消防団員とは理解や協力体制を築いている。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	心掛けている。しかし、夜間、朝など職員一人で対応が集中してしまうと余裕がなくなり、職員主体の関わりや声掛けになっていると反省する場面もある。	定期的な学習会や年1回実施している自己チェックは人格の尊重やプライバシーについて振り返る機会となっている。援助が必要な時は、本人の気持ちを大切に考え、声のトーンやさりげないケアに配慮し自己決定しやすい言葉かけをするよう心掛けている。	
	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自ら表現をする事が難しい方には意識的に話を聞いたり、自己決定できるように働きかけているが、まだ足りていない面もある。		
	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	共同生活の一日の流れの中、可能な範囲で一人ひとりのペースで過ごせるように支援しているが十分ではない。		
	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類選び等、本人の意向を尊重するように心がけている。衣類の購入等、ご家族に任せるだけではなく、職員が似合う洋服を選び購入する場合もある。ヘアカットの際は、好みのスタイルを美容師に伝えてもらったり、化粧品など購入の希望があれば対応している。		
(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	個々の力に応じてできる作業に取り組める環境である。野菜の下ごしらは日課として定着している。誕生日や行事の時は好みを聞きながらメニューを決めている。	利用者と一緒に種まきから育てた野菜を献立に活かし、日課としての野菜等の下ごしらは定着している。一人ひとりの好みや力を活かしながら、食事の準備や片付けを職員と共に楽しみながら取り組んでいる。定期的に管理栄養士から献立や調理法のアドバイスがあり、誕生日や行事の献立は利用者と相談して決めている。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量を把握している。残食は極めて少なく、「おいしい」と感想をもらっている。年齢、活動量、体重に応じて提供量を調整している。低体重の方が3名あり、医療とも連携しながら支援している。		
	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事の都度歯みがきやうがい、義歯洗浄を行うように声をかけ、必要な方の見守りを行っている。お茶の前にはうがいを準備し習慣化できている。口腔ケアの評価までは至っておらず、今後の課題である。		
(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の記録を取り、自立支援に活かしている。個々の排泄状況によって排泄の材料を準備している。	個々の排泄パターンを把握し、行動の仕草やタイミングを図りながら声掛けを行い、自立に向けた排泄支援を行っている。個々の排泄状況によりパット類の準備をし排泄の失敗で自尊心を傷つけないよう、さりげない支援と配慮を心掛けている。	
	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を把握し便秘への対策を個別に対応している。特に水分摂取を促し、毎日ヨーグルトや果物を提供し、バランスの取れた献立に努めている。排便管理の重要性を職員は理解し、便秘日数の把握など、関心を持って取り組んでいる。		

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の日程を居室のカレンダー等で事前に伝えている。入浴の頻度は個々の体力や健康状態によって個別対応としている。菖蒲湯、ゆず湯、入浴剤などを使用し季節を感じ、リラックスできるように努めている。	入浴は週2回の午後の時間を基本としているが、入浴の頻度は個々の体力や健康状態により個別対応とし、ゆっくりと入浴を楽しんでもらえるよう配慮している。蒲湯やゆず湯等のほか入浴剤を使用して、季節を感じながらリラックスした入浴できるよう努めている。湯上りには本人こだわりの化粧品をそれぞれで愛用している。	
	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温に注意し空調管理をこまめに切り替えるなど心地よい環境づくりに努めている。		
	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	理解と確認に努めている。現在服用している薬剤をいつでも確認できるように整理してある。		
	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人のやりたい事、得意、不得意を把握し活動につなげている。また、やりがいを感じられるように支援している。		
(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出が自粛状況ではあるが、外出の際は安全に注意し、屋外の支援対応を個々に定めている。施設敷地内で散歩をしたり、気分転換を図っている。	敷地内の四季折々の草花を見ながらの散歩や畑作業は、気分転換を図りながら日常的に行われている。本人の希望を把握しての個別外出支援は気分転換やストレス発散の機会として一人ひとりの習慣や楽しみごとに合わせ、移動時の対応に配慮をしながら外出支援に取り組んでいる。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金所持を希望する人は現在いない。仮に、持ちたいと相談があった場合は慎重に検討するつもりである。少額であれば所持することができる事を家族には説明している。		
	○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があればいつでも対応ができる。年賀状のやり取りの事例がある。ご家族への手紙を働きかけたが希望しなかった。		
(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者同士の関係性に配慮し席を考へたり、居心地の良い空間づくりに努めている。共有スペースからでは外を眺められる環境ではないが、職員と過ごす時には外の様子や季節を話題にする事で季節を感じてもらおうようにしている。また、花や季節の作品を飾り、心地よい空間づくりに努力している。	共有スペースは安全かつできる限り自立した暮らしを送るため、不必要なものを取り除いて整理し活動的で居心地の良い空間造りを心掛けている。テレビ画面が誰からもよく見えるようソファが配置され、季節の花を囲みながら気の合う者同士で安心した時間を過ごせるよう工夫している。	共有空間の居間や食堂は一体的なつくりで、すべてが視野に入りやすく、多少の圧迫感がある。今後は、生活感や季節感を取り入れ、安らぎと潤いをもたらす家庭的で温かみある装飾等を工夫し、利用者の居心地よい安心できる居場所になるよう期待したい。
	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	余暇時間の過ごし方は個々の状態や意向に合わせて活動ができるように配慮している。		
(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談をしながら馴染みの物を持ち込むように案内をしている。また、状態に合わせて生活しやすいように工夫をしている。	居室の大きな窓から差し込む温かな日差しは、広い部屋を明るく照らしている。本人や家族等と相談しながら家族との写真等をはじめ、使い慣れたものや馴染みのものを持ち込み、状態に合わせて安全に生活しやすく落ち着いて過ごせるよう支援している。	

外部	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
	○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に移動ができるように席を工夫したり整理整頓に努めている。事故予防対策委員会を中心に危険箇所を点検し、環境整備に取り組んだ。不安を抱えた利用者には訪室し安心して頂けるように努めている。施設仕様の設備であるため、混乱を生じやすい環境である。		